

品目：たまねぎ

環境こだわり農産物の基準（5割以下の基準）

化学合成農薬（延べ使用成分数） 7成分以下

化学肥料（窒素成分量） 13kg/10a 以内

技術体系例 たまねぎ

生育ステージ 防除時期	作付前				生育期間中									
	作付体系	7~8月	9月	播種前	全般			定植時	生育初期	生育中期	生育後期			
防除方法・使用資材・薬剤名等	ほ場ローテーション	太陽熱消毒（苗床） セル育苗 （購入培土利用）	雨よけ育苗	土壌消毒剤	捕殺	補植	病害株の引き抜き	マルチ被覆	殺虫剤	微生物殺菌剤	殺菌剤	殺虫剤	銅剤	殺菌剤
立枯性病害	★	★	★	★	●									
べと病	★	★									●			●
白色疫病	★										●			●
軟腐病	★	★					★		★				●	
腐敗病	★						★							
黒斑病	★										●			
灰色腐敗病	★						★				●			
黒点葉枯病	★	★												
タマネギバエ									●					
タネバエ									●					
ネキリムシ類					★	★								
アザミウマ類												●		
(例)使用農薬等		(石灰窒素)		(バスマイド微粒剤)					ダイアジノン粒剤5	バイオキーパー水和剤	ジマンダイセン水和剤	モスピラン水溶液	Zボルドー	リドミルM Z水和剤
化学合成農薬成分数		(1)		(1)					1		1	1		2

注) ●:薬剤防除対象病害虫、★:天然資材または耕種的手法

農薬の登録は随時変更があるので、農薬の使用にあたっては、必ず農薬ラベルを確認し適正に使用する。

* 印のものは、登録の対象害虫等が限られているので登録を確認する。

ほ場周辺は除草剤を使用せず、草刈機による管理またはグランドカバープランツを植栽する。

病気 **べと病**



べと病の病斑



べと病にかかった葉先（たまねぎ）

発生しやすい時期

4月頃～5月頃

原因（発生要因）

- ・ 病気の出たほ場で被害にあった茎や葉からうつります。
- ・ 土や風、水でうつります。
- ・ 15℃前後で湿気の多い時に出やすい病気です。
- ・ ねぎ、わけぎ からうつります。

対策（減農薬技術）

- ・ 育苗は排水のよい、病気の出ていない場所で行い、健全な苗を定植します。
- ・ 排水の悪いほ場では暗きょや排水溝を作ってしっかり排水します（白色疫病も同様）。
- ・ 2～3月頃に病気にかかって葉が曲がった株を抜き取ります。
- ・ 育苗中と3月にジマンダイセンを予防散布します。
- ・ 病気が出たほ場では、被害にあった茎や葉を残さず集めて、焼却するか堆肥化します（白色疫病も同様）。
- ・ 栽培するほ場では連作を避けます。

病気

白色疫病

(はくしょくえきびょう)



白色疫病かかったねぎ

発生しやすい時期

早生種 2月頃～3月頃、中晩生種 3月頃～4月頃（生育初期）

原因（発生要因）

- ・ 病気にかかった葉や玉、根が土の中で夏を越してうつります。
- ・ 15～20℃、特に15℃以下で発生しやすくなります。
- ・ 湿気の多いほ場や、乾湿差の大きいほ場で被害が大きくなります。
- ・ ねぎ、わけぎ、にんにくなどからうつります。

対策（減農薬技術）

- ・ 育苗は排水のよい、病気の出ていない場所で行い、健全な苗を定植します。
- ・ 育苗中に発生したら抜き取って灌水を控えます。
- ・ 病気にかかった株はただちに抜き取ります。
- ・ 早生種では2～3月頃、中晩生種は3～4月頃に重点的にジマンダイセンを予防散布します。
- ・ 栽培するほ場では連作を避けます。

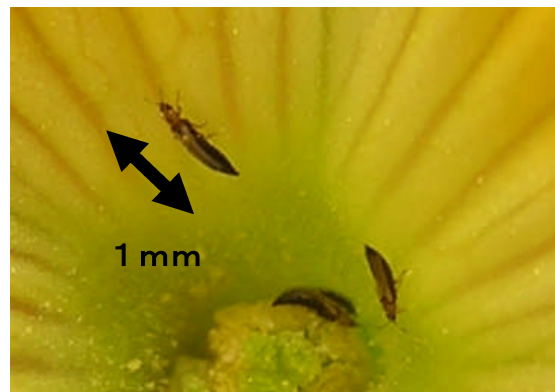
害虫 **ネギアザミウマ**

発生しやすい時期

7月頃～8月頃

原因（発生要因）

- ・ 雑草地で冬を越した成虫が飛んできます。
- ・ 20～25℃、雨が少ないと出やすくなります。
- ・ 大きさが1mmあまりの小さ
- ・ な虫が葉の汁を吸って傷をつけます。



アザミウマの拡大写真

対策（減農薬技術）

- ・ 冬を越した成虫は、ほ場のまわりから飛び込むので、ほ場のまわりをよく見ておきます。
- ・ 株の中心の葉をよく調べて、早めに予防散布します。
- ・ 発生したら防除の徹底します。放っておくと激発します。
- ・ 土の中でさなぎになっていて、すぐに次の成虫がでてきますので、1週間から10日あけて2回防除します。

害虫 **アブラムシ類**

→ ブロッコリーの頁を参照



アブラムシの被害